

第10回木更津市立小中学校適正規模等審議会会議録

○開催日時：平成22年11月8日（月）

午後1時30分から午後3時50分まで

○開催場所：木更津市役所6階会議室

○出席者氏名

審議会委員：佐伯康子、内田慎一郎、川名和夫、青柳敬子、石井徳亮、
坂井麻貴子、池田利一、金子邦夫、山口嘉男、石渡宏

教育委員会：初谷教育長、鶴岡教育部長、石井教育部次長

（教育総務課）宮澤副課長、

（事務局 学校教育課）高澤参事、浪久副課長、安見主査、
鶴岡主査

○議題等及び公開非公開の別

議事 (1)適正配置に向けての学校ごとの方策について：公開

○傍聴人の数 3人

1 開会（佐伯会長）

ただいまから第10回木更津市立小中学校適正規模等審議会を開催します。

2 会長あいさつ

本日は第10回目の審議会となります。

いよいよ残すところ富来田中学校区のみとなりました。前回結論の出なかった学校もありますので、その学校とあわせて、最後まで十分に審議していきたいと思っております。よろしくお願いいたします。

3 教育長あいさつ

こんにちは。大変お忙しいなかお集まりをいただきまして、ありがとうございます。

会長のごあいさつで、心なしか10回というところに力が入っていたように感じました。現地を視察していただいたりして、当初予定していたよりも回数を重ねて、審議検討をしていただいておりますが、前回の鎌足・中郷中学校区から一部繰越しの課題がありますけれども、今日の富来田地区の学校についての検討で、学区ごとに進めてきた個別の学校の具体的な検討については最終回となります。

重たい仕事で、大変恐縮しておりますが、ぜひよろしくお願いいたします。

一 資料確認 一

・シミュレーションデータ

3 議 事

佐伯会長 それでは、本日の議題に入ります。

 適正配置に向けての学校ごとの方策についてです。

 まず、前回委員の皆さんからご要望のありました、小規模校のメリットやデメリット、学校行事や部活動、先生方の指導体制などで、具体的にはどのようなものがあるのか、それから統廃合による影響はどのようなものがあるのか、事務局説明をお願いします。

高澤参事 中間答申の29ページを参照していただきながら、お話ししたいと思います。小規模校・大規模校のメリット・デメリットの表がありますが、まず生活面で小規模校のメリットは、その表にまとめてあるとおりです。

 近隣市で直近で幾つか統廃合をした学校がありますので、参考意見をお聞きしました。

 生活面で、中学校では、生徒指導の課題が発生したときに、小規模校であると問題行動の内容が全校的に波及しやすいというデメリットがあるというお話がありました。

 教育活動面で、小規模校では、行事等で小回りがよくきく、異学年交流がしやすいといったメリットがあるということでした。一方デメリットですが、希望する部活動やクラブ活動が制限されるということが、本市も含めて実際にあります。例えば鎌足中学校は、現在部活動が野球とテニスと卓球の3つしか展開できない状況です。中郷中学校は、男子が野球と卓球、女子が卓球とテニス、男女ともに2つの部活動しか展開できていません。行事等における活動について、子どもたちの活躍できる場は人数が少ないので増えますが、子どもたち一人ひとりが背負う役割、負担が大きくなります。それから、社会科見学や就学旅行などの校外活動の場面でバス等を使用したときに、一人当たりにかかる費用の負担が大変大きくなるといったデメリットがあげられています。

 教職員の組織、指導体制をみますと、デメリットのなかで、教科数を満たす教員数の確保が難しいという点がありますが、現実問題として、クラス数に合わせて学校の先生方の定員配置は決まりますので、小規模校であれば配当される職員の数が少なくなります。したがって中学校においては、全ての教科を満たす教員数が足りないという学校が出ています。そのために、正規の教員がいない学校では、週に何回かその教科を担当する講師が学校をまわって授業を受け持っています。例えば、中郷中学校が保健体育、美術、音楽、鎌足中学校が保健体育、美術、家庭科、金田中学校が保健体育、家庭科、これらの教科の教員が不足していますので、一週間に一日か二日、講師が来て授業をするといった教科担任講師制度を活用しています。

 また、小学校で学年単学級の場合、先生が一人で判断することが大変多

くなって、経験の浅い先生にとってはかなり大変であろうというお話でした。ベテランの先生方や周りの先生方がフォローをしながら、学級経営や教科経営、教材研究等をしていく必要性を感じるという声がありました。

統合による影響ですが、統合されたときのメリットとして、子どもたちのなかで幅広い人間関係づくりができるようになったということ、大きな集団での多様な教育活動ができるようになったということがあげられています。デメリットについては、学区が広がりますので、通学方法に十分配慮する必要があるということです。安房のほうで行われている統廃合を見ますと、路線バスを活用して、かかった費用を市が負担するといった取組みをしているところもあるようです。中学校については、遠距離通学生がいるかたちになりますので、部活動にやや支障をきたす可能性があるというお話がありました。

また、統合した後の校舎や運動場の利活用を十分検討する必要があるということも言われていました。比較的社会教育施設として活用しようというところが多いようです。地域のなかで活用しようとして現在検討を進めているところもあると聞きました。

佐伯会長 この審議会では、前回確認しましたように、適正配置に向けての基本的な考え方として7項目の視点を設けています。今年度審議している学校についてもこの視点は変わりませんが、前回ご意見がありましたように、市街地の適正配置と、将来にわたって人口が増える見込みの少ない地区の適正配置をどうするかということは、審議するうえでとても重要なことだと思います。適正規模に満たない学校であっても、地理的条件などで統廃合などをしないという選択も必要な視点ですが、小規模校のデメリットが、子どもたちの将来にとって望ましくない場合には、いろいろな心情は別として考えていくというのがこの審議会の役割だと思います。

石渡委員 市街地以外の適正配置のあり方について、何か特にご意見ありますか。前回小規模校が課題になりましたが、その日のニュースで、東京都が数年後には30人学級の学校を開始するというのをやっていました。

日本は明治以来一斉学習によって学力をつけてきて、西洋ではこの一斉学習を参考にしたりしています。一方で、日本は一斉学習では一人ひとりを生かしていないので、個別学習にすべきだと、西洋のやり方を取り入れようということで、今両方のよさを検討しているという状況だと思います。

個に応じた教育を考えた場合に、人数が多い少ないで教育は決まらないと思うのです。小規模校でもいろいろな手立てが講じられる、例えば部活動を社会体育にするということは以前から言われていましたので、従来の枠組みで考えるのではなく、社会情勢に合わせて抜本的に適正ということを見直さなければいけないと思います。

小規模校でも、社会性などについては、やがて高校や大学に行く時代でするので、大丈夫ではないかと思えます。

金子委員 小規模校でも個を大切にしていこうということはいいのかなと思いますし、

部活動については、同じようなことを考えていました。数年前になります
が、まちの中での社会体育といった取組みのなかに、部活動を地域に組み
入れていくという考えがあるということを知りました。

子どもたちが育つ場という観点からみて、トライアングル構想を早くか
ら実践しているのは、小規模校の学校ではないかなと思っているのです。
子どもたちが確実に地域のなかで育っていて、祭りや小学校の運動会など
の役に地域が入っていたり、公民館の文化祭では、地域の子どもたちが地
域に本当に溶け込んで一緒になってやっています。メリット・デメリット
は、学校単位で考えられることと、市全体で考えていくことがあると思
います。施設面でも市全体で考えていくことで無駄ではない使い方ができ
るのではないかと思います。

佐伯会長 それでは、前回結論の出なかった中郷中学校と鎌足中学校の適正配置に
ついて、考えていきたいと思います。

まず、中郷中学校から審議していきたいと思います。前回の審議では、
中郷中学校は平成34年度には全校で35人というとても規模の小さい
学校になる見込みであることや、運動場などの環境が十分に整備されて
いないといった現状である一方で、教育に熱心な地域で、小学校と中学校
のつながりがとても大きいということなどがあげられていました。

それでは、ご意見をお願いします。

山口委員 中郷中学校については、30人ほどになるということで、将来的に増
える見込みもあまりないとなると、このまま単独校として存続するのはな
かなか難しいのではないかなと思います。

市に聞きたいのですが、統合などを行う場合に、目安となる基準のよ
うなものが県や市にあるのか、市の裁量で検討して実行に移していけるも
ののでしょうか。

高澤参事 統廃合について、特別な基準はないと考えています。実際に学校運営を
していくなかで、二つの学年が一つの教室で勉強するような、複式学級に
なったときに統合に入るといったところが多いようです。

学校行事や授業の展開などにおいて、子どもたちの学習効果を上げるう
えであまり好ましくないであろうといった判断のもとに、統合に踏み切っ
ていくというのが、近隣市でも比較的多いように思います。

山口委員 仮に統廃合を行う場合、最終決定に至るまでにはどのような手続きをと
るのでしょうか。答申後に庁内に検討部会を設けて検討して次に進むとい
うことだったと思いますが、最終的にはどういう手続きによって統合が決
定するのですか。

高澤参事 確定ではありませんが、審議会でもいただいた貴重なご意見につきまして
庁内検討委員会で再度内容確認をしていきたいと考えています。教育委員
会の方針、市の方針を定めて、動いていくようになると思いますので、広
く市民の皆さんのご意見をいただくことを考えて、パブリックコメントを

視野に入れていきます。実際に統廃合という段になった時には、保護者の皆さんのご意見や地域の住民の皆さんのお考えをいただく場が必要だと考えていますので、保護者会や地域の皆さんの集まりなどを通して、最終的に判断をしていくことになるかと思えます。教員の配置や施設についても、併せて検証していく必要があると考えています。

山口委員 市議会等についてはどうかたちで、どの時点で対応するのですか。
高澤参事 方針ができたときには、市議会にもご報告しなければいけませんし、実際に動き始めるとなればその前段で市議会にお諮りしていくかたちになると思えます。時期は判断できません。

川名委員 中郷中学区の子どもたちの多くが学区外で他の学校に行っているという話があったと思いますが、現状はどうでしょうか。中郷中の子どもの数がかなり減っている状態で、学区外に出て行くというのはどういったことかなど。

石井委員 学区外に通われる子どもさん方は鎌足でもあります。耳にしたところでは、小規模校だと子どもの競争意識が減るのではないかという考えを持っている方もいらっしゃるかと、子どもが少ないとどうしてもその親は出ていかなくてはならなくなる、ずっとPTA役員をやらなくてはならなくなるから、それを避けるために大きい学校に通わせてしまうといった話を聞いたことがあります。

内田委員 祇園小学校の役員をやっていた時期がありまして、その当時中郷地区から通っていた方が役員をやっていました。ですから、必ずしも役員がやりたくないという方ばかりではないとは思いますが、さきほどの小規模校のデメリットにあったような、競争心が育ちにくいなど子どもの教育上のことを考えてということはあるかと思えます。

妻も小中9年間クラスが変わらない学校に行っていた経験がありまして、良いときは良いのですが、悪くなったとき、修復不可能になったことがあるという話でした。そういった小規模校のデメリットも大規模校に行く一つの原因になったのではないかといった推測はできると思えます。

青柳委員 友だち関係がうまくいかなくて、小規模校に来て生き生きとした子どももいましたし、逆に、小規模校だとどうしても周りの目が固定観点に陥ってしまうところがあって、友達同士のトラブルがあると、年代を追っても修復しにくいために、よその地域に行かなければいけなくなったということもありました。中郷中にしても、とにかく子どもたちの人数の減少傾向を見ますと、大変深刻な問題で、小規模校でも子どもたちが生き生きと育つ環境は工夫すればできるし、現段階でも子どもたちがよく育っているというお話もありましたが、学校の先生が教えることだけが大事なのではなくて、校庭に出て遊びまわるなかでたくさんのお話を吸収して育ってきたと思うので、友だちが多いということも、子どもたちにとってかけがえのない大事なことで思えます。少子化で学級の子どもたちが少なくなってきたにも関わらず、年々子どもたちのコミュニケーション能力がないた

めに起こるトラブルは増えている傾向を考えると、トラブルもあるけれども、仲良く楽しくもあるといった友だち関係を、濃く多く経験させてあげたいと思います。

坂井委員 情報が多くなったという時代背景のせいだとは思いますが、自分の興味のあることにしか目を向けない子どもが増えているのを感じています。長男が自分のクラスの子の全員の名前を覚えていなくて、先生にその話をしたらそんな子は今たくさんいると言われました。

下の子のことで悩んできたのですが、ある先生は、少ないところに入れてやっていけば、国語や算数の授業で大勢の中では半分しか伝わらないこともよく伝わるかもしれないけれど、そんなことよりもコミュニケーションをとるといことが重要だと言われました。世の中に出て行ったときに、こういう人もいるのか、ああいう人もいるのかと思えるように育てていけないといけないと。二中で、子どもの多いところに行っていますが、本人からは聞かなくても、友だちのお母さんや周りの人から子どもの様子を聞くと、親としては安心します。鎌足中学校のような学校に行けば、先生たちも一生懸命に盛り立ててくれるのだと思いますが、どちらが良いというのは分からないので、想像でしか言えませんが、二中で良かったと思っています。

池田委員 中郷中学校の側を通る機会が多いのですが、生徒の姿をあまり見ないし、校舎やグラウンドの手入れが行き届いていない感じがやはりします。子どもたちを、学校自体をもう少し活気付けてあげたいと思います。

浪久副課長 さきほどお話のありました、中郷中学校区から学区外にしている生徒は14人です。

安見主査 平成21年度に中郷小学校を卒業した児童は24人、そのうち中郷中学校に進学した子は19人、私立に行った子が4人、学区外で清川中に行った子が1人です。中郷中学区の現在の中学1年生から3年生までのうち、14人が私立または学区外の中学校に行っています。

川名委員 何らかの理由で中郷中に行かない、他の学校を選択したということですね。どういう理由なのかは分かりませんが、学区外で他の公立の学校に行っている子は、比較的大きな学校に行っていることが多いように聞きました。だとすると、親御さんか本人がそういう環境を期待しているということになるかなと。だからといって中郷中は廃校にしまおうという単純なことではないのですが、その辺をどう考えていくかが、小規模校を考える基になる気がします。

学校を廃校にするということを市が口火を切るとき、行政側にはそれなりの理論があるのだと思います。子どもにできるだけ均等な教育条件をつくってあげたいとか、経費の面からとか。でも一番大事にしてあげなければいけないのは、地域と子どもたちだと思うのです。子どもたちにとって一番良い教育環境は何だろうと考えていかなければいけない。小規模校で期待できる教育活動もありますし、大規模校でなければできない教育活動

もあります。将来の子どもたちにどうなっていった欲しいかという願いを込めなければならないと思います。

大規模校の中でも小規模の良さを生かすような教育活動はできると思っていますので、私はある程度規模のある学校の中に子どもたちを置いてあげたいと思います。いろんな体験をさせてあげて選択肢を増やしてあげたいですし、いろんな人間と会って人間のレパートリーを増やしてあげたい、いろんな人間を知って、自分がどうやって生きていくか、人とどうやって関わっていくか、距離感を持っていくかということ学んでもらいたいと思うのです。それと、個人を伸ばすために、個別の指導がどうやって担保されるかという問題になってくると思います。

難しいのは、規模が大きいほうが良いとして、仮に中郷中を統合するとすると、中郷という地域社会が消えてしまうのではないかということです。下手をすると、中郷に住む人が減る、新たに中郷に住むという思いを持つ人が減る、ますます人口の偏りを増長しかねないと思うと、非常に難しい判断です。まちづくりと兼ね合わせて考えていかないと。

佐伯会長 考えれば考えるほど非常に難しいことだと思います。中郷という地区のことを考えていくことは必要だと思いますが、この審議会の原点に戻って、中郷地区の中学校に通う子どもたちにとって、未来にわたって、今考えられる可能性の中で最善の方法を探るという観点から、皆さんの意見を集約すると、統合を検討したほうがよいのではないかということになりますか。

川名委員 それを視野に入れて考えていくしかないと思います。

青柳委員 学校はコミュニティの核だと思っていますので、市の教育のあり方と、コミュニティのあり方をどう考えていくかということが重要だと思います。木更津市全体として、残したい地域が保全されるためのいろいろな工夫を盛り込んでまちづくりをしてもらいたいと思います。

佐伯会長 中郷中学校については統廃合を視野に入れて、まちづくりの面では今後中郷地区のあり方を十分検討してもらいたいということですね。

《休 憩》

佐伯会長 鎌足中学校について審議したいと思います。

鎌足中学校も、置かれている状況としては中郷中学校に近いということでした。今後は小規模化が進むと考えられます。中郷中学校と大きく違うのは、隣接する学校との統合などを考えると、通学距離が非常に長くなるということ、それから、学校の建設年度をみると昭和60年で、耐震基準が満たされているということでした。

前回、鎌足地区以外の子どもたちがどれくらい鎌足小中に在籍しているかというご質問がありましたので、まずこのことについて確認したいと思います。

石井委員 前回会議の後に、小中両校の校長から聞き取りをしましたので、よろし

ければ私から説明します。

小学校では、1年生14人中3人、2年生が16人中3人、3年生が11人中3人、4年生が26人中3人、5年生が13人中2人、6年生は16人中1人、合計で96人中15人、割合とすると15.6パーセントが学区外から来ています。地区でみると、畑沢、請西、八幡台、伊豆島等が見受けられるという話で、来年度の新入学児童についても、19人中3人が学区外で、あと2人増える可能性が高く、12月頃確定するということでした。少人数で落ち着いているということで、親御さんと子どもさんの両方が希望しているとの話でした。

LDやADHDなど、集団活動に不安のあるお子さんもいらっしゃるということです。現状では、LDやADHDの方が2人いまして、通常なら特別支援学級に入るのかもしれませんが、普通学級で今うまく行動ができているという話でした。また、年間5組から10組くらいの親御さんが学校を見学されるそうです。今年はすでに3組の方が見学をしたとのことでした。

鎌足小学校に学区外から来ているお子さんに卒業後どちらの中学校に進学するかと聞くと、鎌足中学校に進学したいという答えが多いそうです。

逆に鎌足地区から学区外に通っているお子さんもいますが、そちらの学校には学童保育があるからという理由を聞きました。鎌足小に学童保育が隣接されれば他の地区からお子さんが来るのではないかという話も出ました。

中学校の学区外からの生徒ですが、1年生13人中1人、2年生19人中3人、3年生15人中1人で、合計47人のうち5人、割合にすると10.6パーセントです。そのうち鎌足小学校を卒業してそのまま鎌足中学校に上がったお子さんは1人だそうです。理由としては、人間関係に不安があったとか、少人数の学校を希望したということ、環境面が非常に良いということです。田舎ですので、地元の方が嫁いだ先から実家に子どもを預けて、迎えに来るというかたちで鎌足中学校に通わせるということもあると聞きました。学校からの話では、小中の連携がとれているのが良い方向に向いているのではないかということ、緑が豊かで、少人数なので落ち着いて物事に取組めるのではないかということがありました。

個人的には、役割分担として鎌足小中はこういった面で伸ばしていくかたちを進めていく姿勢を持つしかないのかなと考えます。

佐伯委員 ありがとうございました。それでは、鎌足中学校について委員の皆さんご意見をお願いします。

内田委員 石井委員からのお話がありましたように、鎌足小中学校は努力をされていて、また環境がなせる技で、こういう形になっているのかなと感じます。

中郷小中のときにも議論になりましたが、小規模のメリットデメリット、大規模のメリットデメリットがいろいろあるなか、適正規模が12学級から18学級ということで、基本はこの線でいくべきだとは思いますが、

中郷のときには、地区にいる小中学生が外に出ていることが多いという話でしたが、鎌足の場合は、入ってくる人数が多いという話で、学年3人くらいは学区外から通ってらっしゃるということでいくと、ある意味では、モデルケースになるような学校として現在方向性が出てきている気がします。

また、地理的な面も考慮しなければいけないので、直線距離でいえば八幡台などは近いですが、現実には山を越えるということで、鎌足小中については、そういったところを勘案すると、統廃合は難しいのではないかと思います。

金子委員 賛成です。

佐伯会長 では、鎌足中学校については、通学距離や現在の有り様を考えて、現状維持を結論としたいと思います。

それでは次に富来田中学校区について、審議します。

この学区には小学校が2つあります。馬來田小と富岡小です。

まず、馬來田小学校、富岡小学校、富来田中学校の沿革などについて、事務局で把握している範囲で説明してください。

浪久副課長 富来田地区につきましては、明治22年、町村制交付によって、真里村ほか7村が合併して馬來田村が、田川村ほか14村が合併して富岡村が誕生し、昭和30年、富岡村は分村したうえで両村が合併して富来田町が誕生しました。その後、昭和46年、木更津市と合併しました。

馬來田小学校につきましては、明治5年、真里谷、真里、茅野の3校が開校し、その後明治20年、真里谷尋常小学校として3校が合併して設立されました。昭和22年、馬來田村立馬來田小学校に改称、昭和30年、町村合併により富来田町立馬來田小学校に改称、昭和46年、木更津市との合併により木更津市立馬來田小学校となりました。

次に富岡小学校につきましては、明治6年、富岡村立下郡小学校が創立され、明治45年、現在地に校舎を移転、昭和22年富岡村立富岡小学校に改称、昭和30年、町村合併により富来田町立富岡小学校に改称、昭和46年の市町村合併により、現在の木更津市立富岡小学校になっております。

富来田中学校につきましては、昭和22年に設立された馬來田中学校及び富岡中学校が統合され、昭和46年に富来田中学校が設立され、昭和47年現在地に新校舎が完成し、現在に至っております。

各小中学校におきまして、施設の整備拡充や様々な教育活動を経て現在に至っております。

佐伯会長 馬來田小学校から審議していきたいと思います。

現状と課題については、教室は足りていて敷地面積は十分、通学距離は一部片道4キロメートルを越える地域があり、児童数は減少傾向と予想さ

れます。学級数をみると現在普通学級が10学級、小規模校です。今年耐震工事をしているのですね。

宮澤副課長 本年度実施しております。馬来田小学校は校舎が3つに分かれていて、一つは平成3年度に建築して耐震性能を満たしている校舎です。もう一つが昭和50年代半ばに建築された校舎で、こちらについては耐震補強工事を実施し、ほぼ完了しました。もう一つは、昭和40年代半ばに建築された校舎で、非常に耐震性能が劣っているため、全体を壊して新しい校舎を建てるということで、今年度中に全ての耐震対策が完了する予定です。

川名委員 地理的なことを考えると、この学区は富来田中は残していくしかないのではないかと思います。馬来田小もこのままということでは、課題になるのは富岡小学校をどうするかということではないかと思います。

富岡小は人数からいくと非常に厳しいですよ。この人数だとほとんどが複式学級になってしまうような状況が予想されます。これを存続していくのは、かなり難しいかなと考えます。ただし子どもたちの通学をどうするかといったことは考えなければならないと思います。

佐伯会長 やはり馬来田小学校と富岡小学校との関わりをみながら考えていったほうがよいようですね。富岡小学校の現状と課題を確認しますと、教室は足りていて、敷地面積は十分、通学距離は一部片道4キロを超える地域があり、児童数は減少傾向と予想されます。学級数は現在普通学級が6学級、小規模校です。馬来田小と富岡小を統合した場合のシミュレーションを事務局説明してください。

浪久副課長 馬来田小と富岡小を統合した場合ですが、児童数については、平成22年度319人から減少して平成28年度には約半減の177人となる見込みです。学級数は、平成22年度12学級から平成28年度には7学級となる見込みです。通学距離は、最長で10.7キロになると思われます。

石井委員 馬来田小学校もだいぶ減る見込みですが、馬来田地区には市街化区域があるので、そういったことで人が増える要素があるなら、20年先、30年先を見越していかないといけないと思います。

富岡地区にはそういった市街化区域はないでしょうか。

山口委員 都市計画の関係ですが、地元で聞いているのは、市の都市部のほうで、馬来田地区、富岡地区ともに都市計画の一部変更というかたちで制限を緩和して、住宅を建てられるようにしていこうということ、今月下旬に地域の説明会がある予定です。将来的には住宅建設が進んで、世帯数も増えて、子どもたちも増えていくといった明るい兆しが見えてきているのではないかと思います。

佐伯会長 視察のときに、富岡小学校は今年複式学級になる可能性があったけれども、回避できたというお話を校長先生から聞きましたが、これはどういうことによるものですか。

高澤参事 本年度富岡小学校の児童は全校で61名、2年生と3年生がそれぞれ8名です。千葉県の小中学校の学級編制基準によると、1年生を除いた学年、

2年生から6年生までのうち、引続く二つの学年が16人以下の場合は1学級で編制をすることとなっていますので、本来であれば1学級で編制しなければなりません。2年生と3年生は一つのクラスで勉強して、担任の先生も一人しかつかないということになります。現在の2年生3年生が、平成25年に5年生6年生になるまで、1学級が続くということになります。

平成26年度になりますと、2年生と3年生が合わせて12名しかいませんので、この学年で複式になる予定です。1年生の場合は合計8名以下で複式となりますので、1年生は回避できます。

平成28年になりますと、2年生3年生で13人ですので1クラス、4年生5年生で12人ですので1クラスとなります。

今年度は、複式学級となるところを、2クラスに分けて、1学年1クラスで編制しています。これは千葉県の基準のなかで弾力的運用というものがありまして、複式学級を有する学校が複式を解消する場合は、増置教員を活用してよいというものです。増置教員とは、学校の学級数によって配置される、校長、教頭、学級担任以外の教員です。富岡小は学級数が少ないので、この教員が1名配置されています。一般的には教務主任が増置教員の枠で入ることが多いです。学級数が多くなりますと、増置教員が2名配置されますが、この場合は教務主任と、音楽を中心に全校をみる職員である音楽専科で配置していくことが多いです。

富岡小は増置教員が1名ですので、現在教務主任が2年生3年生のうちの片方に入って1クラス受け持って授業を展開しています。その教員は、教務主任と学級担任を兼ねてやっているという状況です。

平成28年には、複式の対象が2クラスになりますので今年度と同様に増置教員がクラスを受け持っても、どちらかは複式学級になるということ避けられない状況になります。

佐伯会長 都市計画の関係で、制限が緩和されて家が建ってきて子どもたちが通うようになったとしても、28年度の数字はそれほど動きそうにないのですか。

鶴岡部長 さきほど山口委員からお話がありましたように、都市整備部が富来田地区の今後の市街化調整区域の課題を解決するための施策を進めようとしています。今まで農家の長男や次男などしか市街化調整区域内に家を建てられなかったところであっても、地域の地区計画、方針等を決めてその中で弾力的な運用を図っていくという内容だったと思いますが、これは地区で定めていく必要があるので、手続きが簡単にはいかないと思います。それから新たに人が入ってくるとなると、ここ何年かのうちに、即効的にとは考えにくいと思います。

また、仮に馬来田小学校に多く子どもが入ってきたとしても、現在の整備状況からすると、当面はクラスが足らなくなるということはないと考えられます。

川名委員 小学校の子どもをもった親で、仕事をしながら子育てをしていこうという方が増えていると思います。となると、子どもを安心して預けられる場所が欲しいと思うのです。馬来田の人口が減ってきた理由には、そういうところがなかなかなかったということも一つあるのではないかと思います。馬来田小も、できれば富岡小も存続してもらいたいと思っていますが、そのためにはそちらの視点からも施策を展開していかなければならないと思います。富岡地区に住んでも、仕事を続けながら子育てができますよというふうにもできていかないと、なかなか子どもが増えていく状況になるのは難しいかなと。その裏返しで請西や八幡台などで、市の人口はさほど増えていないのに、あの辺がどんどん増えているのは、市内で動いていることも考えられるのではないかと思います。病院や学校や商店が少ないところに住んでいる若い人が、もっと便利なところに行こうと引越してしまう。市内で、かたや集中が起こって、かたや過疎がおこっている、これをうまく平らにしていくような施策を展開していかないと、富岡小が元気になるというのは、見通しがたたないのではないかと思います。

佐伯会長 富岡小は、28年度には、増置教員を使っても複式学級になってしまうという現状をみると、馬来田小との統合を考えていくことになりますか。

内田委員 基本的には川名委員の意見に賛成です。富岡小学校は、訪問して個人的には校舎も校庭も綺麗に整備されていて、とても良い学校だと思いますが、それは置いておいて、平成28年度には複式学級が2つになること考えると、地域としては非常に頑張っているけれども、致し方ないのかなという感じがします。馬来田小学校と併せたとしても、教室には十分余裕があるということでしたので、残念なのですが、富岡小学校は統廃合を考えなければいけないかなと。ただ、10キロを超える通学距離になりますので、このフォローは、スクールバスを出すとかしてちゃんとしてあげないといけないと思います。

金子委員 視察をさせていただいて、本当に心情的には日本の学校の原点を見るようで非常に大事にしたいという気持ちがいっぱいなのですが、それ以上のことは言えないかなという気持ちです。

石渡委員 複式学級というと違和感があるようですが、校長も教頭も昔は学級を持っていました。今は法的にはできませんが。複式学級は本当にいけないことなのか、私は教育効果を上げることはできると思います。通常学級にできれば良いですが、私は複式学級にあまり違和感はないと思います。

高澤参事 方法論の問題だと思います。複式が悪いということはないと思いますが、二つの学年が一緒の教室などで勉強しますので、片方の学年に課題を出しておきながら、片方の学年を指導するというかたちになるかと思っています。そうすると、先生方の指導技術や学習効果の面からみて課題が残ると一般的に言われているということです。

池田委員 川名委員のご意見のとおり、今は勤めているお母さん方が多いので、子どもたちが安心して預けられる学校として、富岡小学校はみてあげたいと

いう思いはあります。

石井委員 中郷地区、鎌足地区、富来田地区全部に言えると思うのですが、学校がなくなるということは、そこに住む若い人たちがいなくなるということを増長しかねないということがあると思います。地元を捨てて街中に出てしまうという傾向がことさら強くなってしまふ気がするので、地域ぐるみで教育、子育てをしていくというのも、個人的には必要かなと思います。

佐伯会長 富岡小学校は、現実的には統合はやむを得ないけれども、存続できたらという思いもある。統合の際には、通学距離を考えて、スクールバスの活用なども視野に入れる必要がある、ということになりますか。

－委員賛成－

佐伯会長 では、富来田中学校に進みます。

現状を見ますと、教室は足りていて、敷地面積は十分、通学距離は一部片道6キロメートルを越える地域がある。生徒数は減少傾向と予想され、学級数は現在普通学級が6学級、小規模校です。

隣接校は鎌足中学校ですが、通学距離からみてどうなのでしょう。

川名委員 道のりでいくと、15キロくらいになってしまうのではないですか。

内田委員 難しいのではないのでしょうか。

石井委員 袖ヶ浦の中学校のほうが近いです。

佐伯会長 富来田中学校は、通学距離の点から統合は難しい、現状維持とせざるを得ないということになりますか。

－委員賛成－

佐伯会長 以上で全ての学校の審議が終了しました。

当初の予定では、次回、来年2月が最終答申ということでしたが、もう一度2月の答申の前に会議を開催して、最終答申案を検討したいと思いたすがいかがでしょうか。

－委員賛成－

川名委員 地域的な条件などで、小規模校が残らざるを得ない状況が出ています。

富岡小学校で2つ複式学級になってしまうということ考えたとき、複式学級も良いという意見もありましたが、私はできれば複式ではないほうが良いと思っています。そういうときに、県からの増置職員は1人ですが、それ以外に手はないのでしょうか。市で職員を雇って配置するとかいうことはできないのでしょうか。

また、小規模の中学校で苦勞するのは、教科担任です。大きい学校では、きちんとその教科の免許を持った教員から子どもたちは教わることがで

きるけれども、小規模だと例えば理科の免許を持った教員から英語を教わるというようなことが生じる。そういう子どもたちを出さないために、教科担任講師というのがある、それはそれで効果はあると思いますが、学校全体で考えると、教科だけを教える先生がいれば良いというわけではないと思うのです。教科だけを教えて帰ってしまうと、学校としては戦力は1減です。子どもたちの悩みを聞いたり、友達関係を調整したりということも仕事の一つですから、そういうことを考えたときに、教科だけを教えて帰ってしまうのではないような制度があればと考えます。そうしないと、小さな学校がいつも割が合わないと思うのです。

高澤参事 中学校の教科担任講師制度は、県の非常勤配置になっていますので、勤務時間体系が決まっていて、幾つかの学校を掛け持ちしている講師がほとんどです。一つの学校にずっと居てもらうということは、現行の制度ではできず、県の基準や仕組みの変更が必要になると考えられます。市独自の職員採用のなかで教員枠が取れるようになって、教科担任に代わる正規教員が雇用できればこの課題は解消できるようなになると考えますが、現状では両方とも難しいと考えます。

佐伯会長 それでは、これまでの審議結果を事務局でまとめて案を作って、次回検討したいと思います。

最終答申が2月ですので、今回は1月中旬に開催したいと思います。事務局は、中間答申のときと同様にあらかじめ答申案を各委員へお送りしてください。

長時間にわたりましてご審議ありがとうございました。

以上で、第10回木更津市立小中学校適正規模等審議会を終了します。

上記会議録を証するため下記署名する。

平成22年11月19日

木更津市立小中学校適正規模等審議会会長 《会長署名》